

2022年2月19日(土)

老球の細道656号

日本女子バスケットボールに対する杞憂

会津バスケットボール協会 室井 富仁

今は昔、優勝候補筆頭の福島工業を県総体準々決勝でダブル OT の末に破り勝利を得たことがあった。私のバスケットボール指導歴の中でアップセットベスト5の一つに入る。そしてこの時、目指していた県大会優勝に最も近づいた時となったのだが、未熟にもこの勝利に酔いしれて翌日の準決勝で伏兵郡山高校に2点差で敗れてしまった。さらに3位決定戦においては同地区の会津工業に20点差もつけられ大敗した天国と地獄の思い出である。

子供の頃に親からいつも言われ続けた小言があった。「良いことがあったからといって調子こいているとその後必ずしっぺ返しがかかるぞ」。要は、勝って兜の緒を締めよということであった。教えにも関わらず今まで兜の緒を締め忘れて失敗したことは数知れず。

先日バスケットボール女子ワールドカップの予選リーグが大阪で開催された。東京五輪で日本バスケットボール界初の銀メダルを獲得した日本女子チームが新しいヘッドコーチのもとでどのようなゲームを見せてくれるか注目された。FIBA ランキング上位のカナダに逆転勝ちをして流石と思わせたのも束の間、二日後に行われた格下のボスニアヘルツェゴビナにあっさり逆点負けを喫してしまった。その時脳裏を横切ったのは2011年女子サッカーワールドカップで優勝した「なでしこジャパン」の現在に至る凋落の姿だった。

ワールドカップ優勝後テレビなどのマスメディアにもてはやされ、監督や主力選手などの露出度が大幅に増えた。それまで認知度の低かった女子サッカーが社会的に注目されるようになったが、徐々にチーム力は低下し結果も出せないで今に至る。バスケットボール女子もサッカーの二の舞にならなければよいのだがとふと思った。

東京五輪銀メダル獲得の後、バスケットボール女子もテレビのワイドショーやお笑いバラエティーに出演するのを目にするようになった。私はこの状態を見て「まだまだてっぺんに立っていないのにおちゃらけていいのか？次のワールドカップは大丈夫か？」と他人事ながら危惧していた。そんな折、16日の朝日新聞にバルセロナ五輪出場の法政大・杉本教授の現在の五輪の軽さに対するコメントが掲載されていた。一部抜粋して下記に表す。

「メディアには、選手やスポーツの価値を高める発想が欠けていると感じます。東京五輪は多くの人がコロナ禍で苦しむ中で開かれ、あれだけ五輪やスポーツの価値を社会的に考えようとなった。それなのに大会後、メダリストがメディアに出るケースが多くはバラエティーで、いじられ役になっている。選手の本来の姿を見せることを優先させず、別の側面ばかりを見せ、当座のコンテンツにしています」

テレビに出演することは喜ばしいことではあるが、アスリートは自分の競技する姿がテレビで放映されるだけで満足するべきである。引退しない限り常に次なる戦い、挑戦が控えている。「奢る平氏久しからず」「満足した豚よりも不満足なソクラテスであれ」。人は満足した瞬間下降線を描く。今回の試合の結果が杞憂であることを切に願う。